

# カワカブに通い続けた 25 年

～遺体捜索と聖山探索そして山に生きる人々との出会い～

小林尚礼



図1 梅里雪山 明永氷河の遺体遺品発見位置 (1998年～2023年)

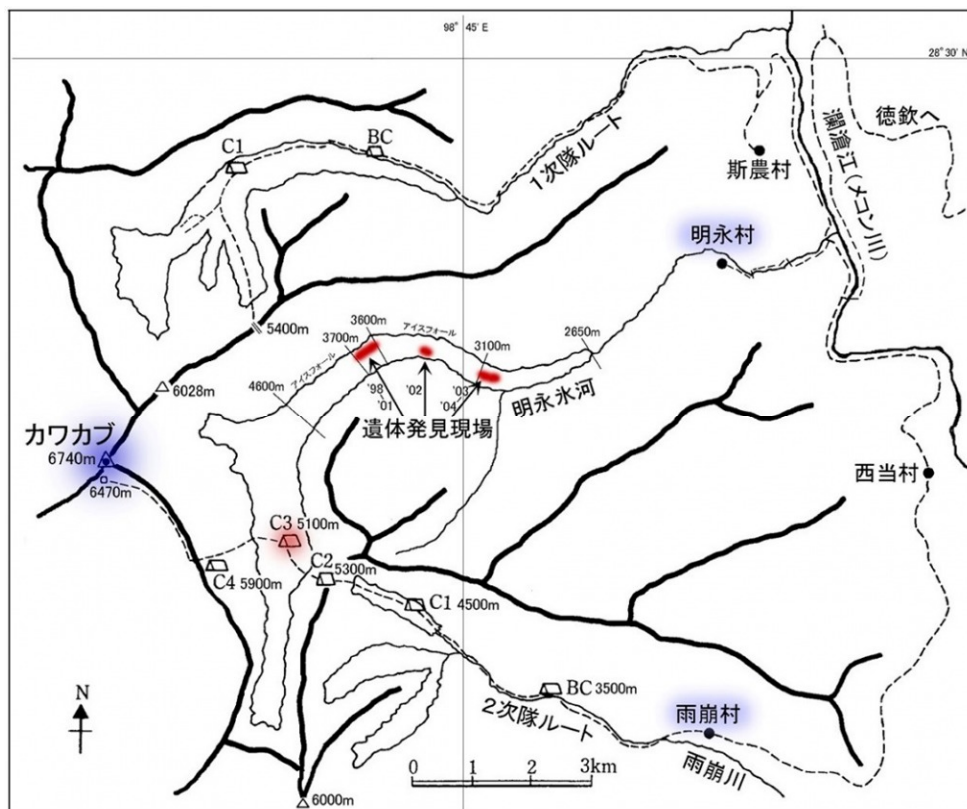


図2 登山ルートと明永氷河

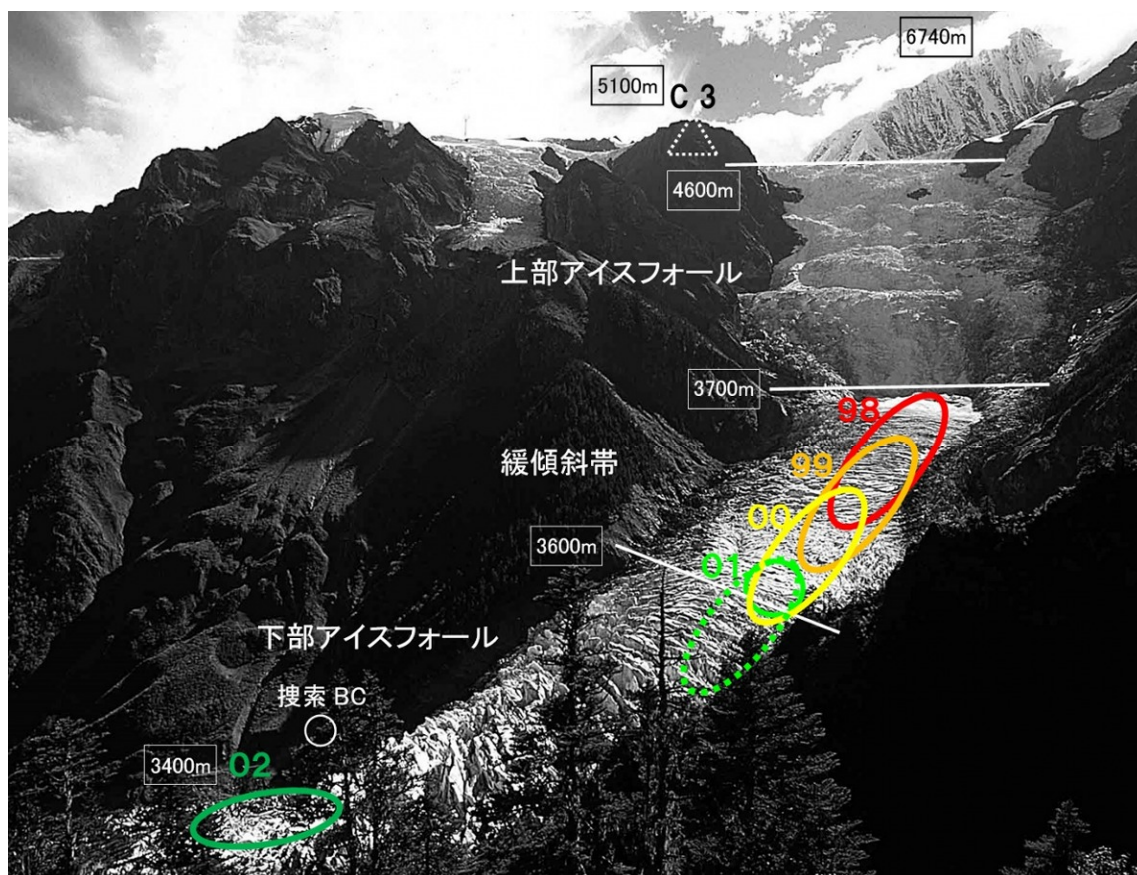


図 3 発見初期の遺体遺品の動き(1998 年～2002 年)

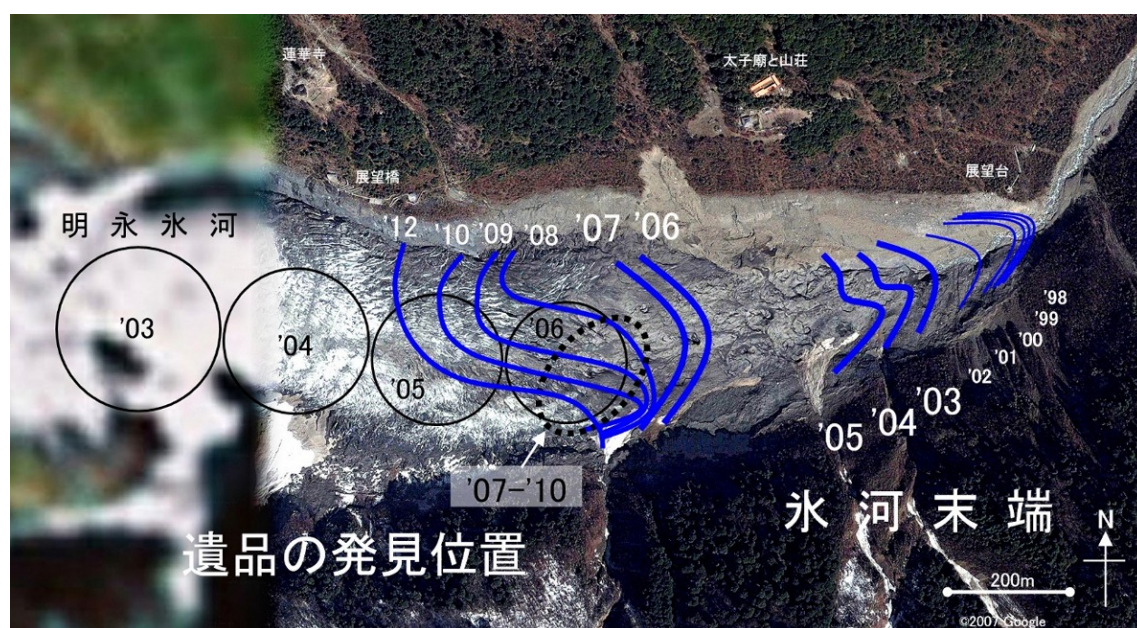


図 4 氷河末端部での遺品の動きと氷河の後退

| 年  | 98  | 99  | 00  | 01 | 02 | 03  | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | 09 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15  | 16 | 17 | 18 | 19  | 20  | 21 | 22 | 23  | 合計       |
|----|-----|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|-----|----|----|-----|----------|
| 回数 | 2   | 10  | 5   | 5  | 4  | 4   | 4  | 6  | 5  | 6  | 4  | 4  | 3  | 2  | 3  | 4  | 2  | 2   | 2  | 2  | 1  | 1   | 1   | 1  | 1  | 3   | 88 回     |
| 遺体 | 5   | 7   | 2   | -  | 1  | 1   | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -   | -  | -  | -  | -   | -   | -  | -  | -   | 16 名     |
| 重量 | 370 | 260 | 120 | 70 | 30 | 250 | 40 | 10 | 10 | 10 | 10 | 5  | 5  | 10 | 5  | 10 | 15 | 0.5 | 10 | 10 | 1  | 0.5 | 0.1 | 5  | 0  | 0.1 | 1,257 kg |

全重量 1,600kg(推定)

表 25 年間の搜索回数と遺体確認数、收容重量

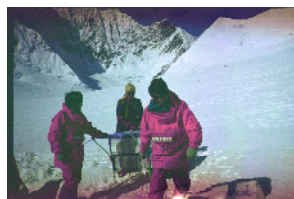
中国でのトークショー「一席」2023年11月  
「梅里雪山 17人の友を探して」 上映写真リスト



A01



A02a



A02b



A02c



A03\_1996登山



A04a\_氷瀑



A04b\_散乱遺品



A04c



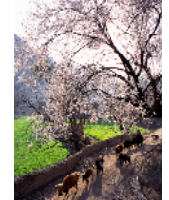
A05



A06\_正月チャシ家



A06b\_朝の祈り



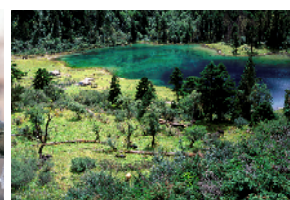
A07a\_桃と牛



A07b



A07c



A08a\_シュートンツ



A08c



A08d



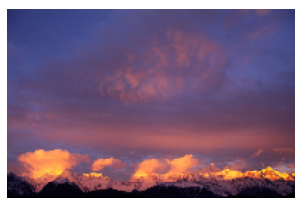
A09



A09b



A10



A11\_朝日に燃える山群



B1



B2\_ゴンパ・ランジョン



B3



B4



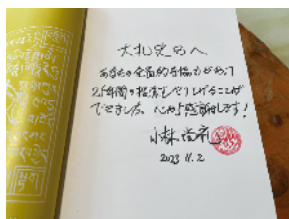
C01



C02a



C02b



C02c



C03



C04



C05a



C05b



C07a



C07b



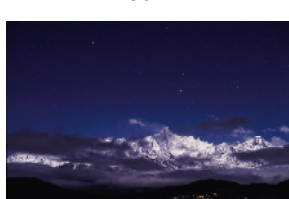
C08



D1\_自画像—氷河1999



D2



## 中国でのトークショー「一席」2023 年 11 月 「梅里雪山 17人の友を探して」日本語原稿

大家好！我叫小礼尚礼、是一个日本人。我的中文不太好，所以说日语。不好意思。

私は登山が好きで、日本各地の山やヒマラヤに登ってきました。大学の山岳部で山登りを始めて、1 年の 100 日以上山に登っていました。その中で後に梅里雪山で亡くなる友人たちと親しくなりました。

### ■A 梅里雪山からカワカブへ

A01 この写真は、黎明の梅里雪山です。山の向こうに満月が沈んでゆきます。これからお話しするのは、私がこの山と 32 年間交流した物語です。山の名は梅里雪山、一番高い頂は標高 6740m で、チベット語でカワカブと呼ばれています。チベット人は聖山として信仰していますが、私たちの山岳会はそれを深く理解せずに、この美しい山に初登頂する計画を立てました。

◎京都大学山岳会は中国登山協会の許可を得て、1988 年から梅里雪山への登山を始め、中国と合同で 3 回の登山隊を派遣しました。その 2 回目の登山で、17 人の隊員全員が消息不明になるという大事故が起きました。1991 年 1 月 3 日のことです。17 人のうち 2 人は特に親しい友人でした。

A02a 遭難した登山隊のキャンプ 2 と、亡くなった隊員たちが写っています。梅里雪山の山頂直下には、このような大雪原が広がっています。この雪原の中に、事故に遭ったキャンプ 3 がありました。当時の写真はフィルムですが、この写真のフィルムは事故の前にベースキャンプに降ろされていました。

A02b, A02c これらの写真は、事故から約 10 年後に発見されたフィルムから現像しました。隊員たちが重い装備をソリに乗せて移動させている様子が写っています。懐かしい仲間たちの姿です。

A03 1996 年の第 3 次登山の写真です。遭難後、亡くなった友人たちの記憶が薄れてゆくことが恐くなりました。彼らと生きた証を残したいとと考えて、梅里雪山への挑戦を決意しました。この登山では、僕がほとんどのルート先の頭を歩いてザイルを張ったので、充実した登山でした。一方で、頂上まであと 500m の地点まで到達しながら、落石の危険のために登頂を断念せざるを得なかったのが非常に、悔しい思いが残っています。どうしても登りたかったので、「隊長の首を変えてでも登りたい！ ここでケツをまくったら一生恨みますよ！」と叫びました。

4 枚目の写真は、最高到達点の 6250m で撮った思い出深い写真です。頂上はすぐそこに見えて、絶対に登れる気がしました。

A04a そして 1998 年、遭難から 7 年後に登山隊の遺体と遺品が発見されました。出現するのは 50 年以上後だろ

うと言われていたので、誰もが驚きました。この写真に、人が 3 人写っているのがわかるでしょうか？ 正面に聳えるアイスフォールは高度差が 1000m あって、途中で遺体が見えても危険過ぎて収容できません。この風景の中で何人もの遺体を目にした時、「よくここまで降りてきてくれたな」と心から思いました。労をねぎらうような感謝の念を感じたのです。

A04b 散乱する登山服です。きれいなままでまだ使えるような感じがしました。

A04c 寝袋に覆われた遺体です。この遺体を見て、隊員たちが就寝中に雪崩に襲われたことがわかりました。この遺体は全身がそろっていましたが、他の多くの遺体は寝袋から出てしまい体がバラバラになっていました。

◎その翌年の 1999 年にも明永氷河に遺体が出現しました。僕は遺体が出現した氷河に 1 番近い明永村に滞在することを決めました。友人たちの遺体を家族のもとに返したいとともに、その直前に会社を辞めて写真家を志していたので、梅里雪山をしっかりと撮りたいと思ったからです。

A05 対岸から見下ろした明永村は土色で、どんなに貧しい暮らしをしているのだろうと不安を感じました。チベット人は気性が荒くて危ないと言う人もいました。僕は緊張しながら、チベット人 300 人が暮らす村に入ってゆきました。

A06 そんな不安を掻き消してくれたのが、明永村の村長の扎史さんとその家族でした。恐る恐る入っていった家の門に「小林你好」と書かれていて、胸を撫で下ろしたことは忘れられません。村長は僕に部屋を 1 つ与えてくれて、家族同様の扱いをしてくれました。この人が扎史村長で、13 歳の長女と 10 歳の長男が写っています。これは 20 年以上前に撮った写真です。他の 3 人はもう既にこの世にいらなくなってしまいました。

A06b 村に暮らし始めて最初に驚いたのは、毎朝村人が山に祈る姿でした。屋上に上がって、針葉樹の葉でお香をたきながら、山に向かってこう叫びます。「アラソロー！」山への挨拶です。その後、周囲の神山の名を読んで、平和と長寿を願います。僕たち登山者は山の頂上しか見ていなかったのに、この人たちはもっと大きなものを山に見ていると感じました。

A07a 貧しいと思っていた明永村ですが、美しい景観と精神的に満ち足りた暮らしがありました。この写真は桃の花の下を毎朝牛が通る様子です。畑には麦の若芽が輝いています。春は村中に桃の花が咲き誇り、桃源郷のようでした。

A07b 2枚目の写真は、家族で食事をする様子です。バター茶やツァンパなど食べ慣れないものが多かったですが、みんなと同じものを食べているとだんだん美味しく感じられるようになりました。その土で育った食材を食べることで、その土地に体が慣れていくようでした。

A07c 明永氷河から溶け出た水を飲む子どもです。

水はとても冷たくて、飲むと山の深さに吸い込まれるような感じがします。この水を飲む子どもたちを見て、氷河に現れた遺体や遺品をできる限り回収しなければと思いました。

◎村に滞在する間、1～2週間に一度の頻度で捜索に行きました。氷河を歩く危険や疲労、遺体を見る気味の悪さで嫌になることもありましたが、欠かさずに続けました。1999年の滞在が終わるまでに12人の遺体を確認して、その後もずっと続けました。

A08a 梅里雪山の周囲には、美しい自然が広がっていました。この写真は、森の中の放牧地です。標高は4,000mあります。周囲の森では山菜や松茸が取れて、鹿や熊など様々な動物が棲んでいます。人間はそんな豊かな幸を得て生きています。

A08c この写真は、雨季の山の様子です。夏は雨の日が多く、山は雲に覆われていますが、この日は珍しく晴れて梅里雪山の山頂が顔を出しました。

A08d この写真は明永氷河を見下ろしたものです。急峻な地形に多くの雪が降るので、樹林限界よりも下に氷河が流れ込みます。世界的にも珍しい風景です。1000mの高度差のアイスフォールと、その下の遺体発見現場がわかります。

◎梅里雪山はチベット人が信仰する聖山で、山群を一周する巡礼の道があります。歩くと10日前後かかる長大な道です。僕は梅里雪山の新しい登山ルートを見つけるために、この道を歩きたいと思いました。1999年滞在の最後の月に初めて巡って、計3回歩きました。

A0 この写真は、瀾滄江と怒江の分水嶺ドケラ峠です。標高は4480m、祈りの旗がはためきます。2回目の巡礼行ではこの峠で雪に降られて、ラバが急斜面を下れないため泣く泣く引き返すことがありました。しかし巡礼者たちは、危険な斜面を命を賭けてでも下ってゆきます。

A09b カワカブを巡る巡礼者です。チベットでは珍しい竹を杖にして持ち帰りカワカブを巡礼した証とします。竹の杖は「ガトゥ」と呼ばれます。僕が巡礼路を歩いていると呼び止められて「あなたが日本人ならカワカブに登るのはやめてくれ。国として約束してくれ」と言われることが何度もありました。

A10 チベット側から見た梅里雪山の北西面です。カワカブの東西南北にあるという聖地の一つノ・ジャジンから入りました。ジャジン村の人々は外から来た人を奥に入れてはいけないと言いましたが、無理に頼んで入りました。1度目では曇って見えなかったもので、2度目の巡礼でようやく目にすることができた風景です。このとき僕は登山のルートを探していました。氷河の奥へと入っていくとき、出会った巡礼者たちのことを思い出し、山から「これ以上近づいてはいけない」と言われるような気がしました。そして北西面にも登りやすいルートはないことを確認しながら写真を撮っているときに、僕はこう思ったのです。“この山は本物の聖山だ、登山をしてはいけないのだ” 梅里雪山への見方が完全に変わり、梅里雪山が「カワカブ」へと変わった瞬間でした。

A11 朝日に染まるカワカブの山群です。1999年から2001年までに、カワカブの全ての季節を訪ねて延べ1年間滞在しました。最初の滞在で村人から「お前の友人が聖山に登ろうとして死んだのは当然だ」と言われたことがあります。それ以来、僕の中で「聖山とは何だろうか」という疑問が湧き起こりました。3年の滞在を経て実感したのは「聖山とは生命の源」だということです。抜きん出て高い山があるから乾いた大地に雨が降り、森が広がり生き物が育まれています。そしてカワカブは仏教の守護神として精神的な支えになっています。この山を見ると、自分自身の生活の中でカワカブに相当するものは何かと問いかけられている気がします。

## ■B その後の活動

B1 梅里雪山での滞在をまとめた本を2006年に出版した後、僕はいくつかの新たな活動を始めました。どれもカワカブから受けた影響を元としています。まず、茶馬古道の旅に出かけました。西双版纳から梅里雪山を経由してチベットのギャンツェまで、2年間に渡って撮影しながら辿りました。この旅の原動力は、明永村で毎日飲んだバター茶です。寒冷なチベットでは育たない茶が、どこから運ばれてくるのかという疑問が出発点でした。

B2 次は、ヒマラヤの聖地を訪ねました。研究者の調査に同行してインドやブータンのチベット文化圏を訪ね、その土地の聖地を撮影しました。チベット人が暮らす土地には、自然信仰の聖地があります。写真は、インドのラダックにあるゴンパ・ランジョン(天然の寺院)と呼ばれる聖地です。球状花崗岩が多数埋め込まれた大岩をご神体とします。インド亜大陸とユーラシアが衝突したときにできた岩を信仰する様は、地球の歴史に祈りを捧げているようでした。小さいものも含めて多くの聖地を訪ねましたが、カワカブの奥深さを超える聖地に会うことはありませんでした。

◎写真撮影の仕事の続けながら、カワカブ会という研究会を作りました。チベットやヒマラヤの自然信仰の聖地について日本で学び、実際にそこへ旅行するという活動です。

B3 この写真は、カワカブのメンバーと梅里雪山を訪ねたときのものです。この会の活動は、一般の人に聖地の素晴らしさを伝えるためであるとともに、梅里雪山で亡くなった17人を追悼する巡礼の旅でもありました。

B4 2008年には扎史村長の娘が来日しました。明永村に恩返ししたいという山岳会のOBが支援することで実現しました。語学留学を経て京都の大学に合格して4年間しっかり勉強しました。卒業と同時に山岳部の後輩と結婚したのには僕も驚かされました。卒業式と結婚式のときには扎史村長も来日して、1ヶ月間日本を旅行してもらいました。その後2人の子どもの恵まれて2023年の今も日本に住んでいます。

## ■C 最後の搜索 2023 年

C01 先月の下旬から20日間、氷河の搜索のために明永村を訪ねました。今週帰ってきたばかりです。17人のうち1人だけ見つからないので搜索活動を続けてきましたが、出現する遺品がすっかり少なくなったので、今年遺品が少なければ最後にしようと決めていました。私たちの滞在中には昆明出身の隊員・王建華さんの子息も村を訪れて、一緒に登山隊の記念碑をお参りました。この碑は京都大学山岳会が中心になって2006年に建立したもので、今も村人によって大切に守られています。

C02a 梅里雪山の搜索活動と山麓での暮らしを描いた『梅里雪山 十七人の友を探して』が、2021年に中国語で翻訳出版されました。今回4年ぶりに明永村を訪れることができたので、お世話になった方々に本を贈りました。この写真はニマウムという村の女性で、他の町に移り住んだのもう会えないと思っていたのですが、今回久しぶりに会えました。本には24年前に撮った写真が掲載されていて僕の好きな1枚なので、そのページと一緒に写真を撮りました。

C02b, C02c 左の写真は、扎史村長に本を送ったときのものです。この人の助けがなければ、搜索活動を25年間続けることはできませんでした。右の写真は、扎史村長に渡した本に書いた言葉です。大切な人に本を贈るときには、感謝の気持ちを一言添えました。扎史村長には「あなたの全面的な協力があって搜索をやり遂げることができました。心から感謝します！」と書きました。

C03 今回10年ぶりに、登山隊が最後に通過した雨崩村を訪ねました。この村の上部に登山隊はベースキャンプを建てました。以前は伝統的な家が建つ素朴な村でしたが、いつのまにか車道が通じてホテルが建ち、1日に何百人という観光客が訪れる様に驚愕しました。

C04 今回の旅には、最後の搜索を撮影したいというドキュメンタリー映画の撮影チームが同行しました。日本での撮影から始めて1ヶ月間に及ぶ撮影行でしたが、北京から来たメンバーは誰も体調を崩すことなく、毎日朝から夜遅くまで撮影に励むさまに感心しました。

C05a この25年の間に明永氷河はすっかり縮小しましたが、4年ぶりに見た明永氷河はさらに大きく後退して河床が露わになっていて、氷河上を歩ける部分が全くなっていることに驚きました。この写真は、今年の明永氷河です。以前の氷河の厚さは30mはあったようで、当時歩いた道ははるか高いところにあってもう通ることはできません。

C05b この写真は、20年前の2004年頃の氷河です。谷底は氷にすっかり覆われていました。この巨大な量の氷が全て解けてしまったことに、恐ろしさを感じます。氷河の表面には土砂が堆積するので一見地面のように見えますが、中は全て氷です。

C07a 今年の氷河末端の写真です。25年前から1キロ以上後退して、手前には大きな池が広がっていました。平坦部は既になく急傾斜のアイスフォールだけが残っているので、氷河に登って搜索するかどうか迷いました。上から車より大きな氷や石が落ちてくることがあります。

C07b 考えたあげく、急傾斜の氷河を登りながら遺品を探しました。最後の搜索になりそうだったので、危険を承知の上で氷河上もできる限り探しました。結局何も見つかりませんでした。

C08 氷河が解けた谷の下流もくまなく探しました。が、見つかったものはほんのわずかでした。下れるところまで下ってゆくと、傾斜が急になって下の方まで見渡せました。望遠鏡で探しましたが何もありません。もこれ以上危険を冒して探す必要はないとわかりました。この場所が、25年間続けてきた搜索活動の最後の場所になりました。

## ■D これから

D1 24年前の扎史村長と小林の写真です。最後の1人を見つけないと思って続けてきた活動ですが、今年の搜索によってもう探す意味がないことがわかりました。これで搜索は終了する予定ですが、この間に育んだ現地の人々との友情は終わることはないと思います。扎史村長や村の友人たちとの関係を、これからも大切にしていきたいと思います。

D2 日本に暮らす扎史村長の娘との関係も同じです。ときに困難にぶつかることもありますが、カワカブの人々から受けた恩を返すためにも、僕は全力で彼女を支えます。そして彼女の子どもたちが日本の私たちとカワカブとのこれからの架け橋になってくれることを楽しみにしています。

D3 夜、月明かりに照らされたカワカブです。この写真を見ると、僕はカワカブの向こうに地球が見える気がします。宇宙から見た地球です。カワカブも地球も「人間の背後にある自然」なのです。自分たちにとっての「生命の源」がどこかに必ずあるということを、カワカブは教えてくれました。搜索活動は終わっても、その教えは終わらないと思います。